

双子の桜

江草 智行



江草智行（えぐさ ともゆき）
1954年網走郡津別町に生る。
地方公務員。1987年から双子の桜フ
ァンクラブ代表。森林、樹と木材と、
総合的な形としての木と人間とのか
わりについて興味を持っている。

桜の木がとりもつ不思議な縁

はじめはみんな見知らぬ人

出合いはほんのささいなきっかけ

それがいつの間にか見知らぬ人から知り合いに

そして夢を語る仲間へと

私達ってサ、まるで樹が成長していくように仲間

を育ててきたんだね

これは、八七年（昭和六十二年）の秋、双子の桜ファンクラブの結成に決定的な役割を果たした「双子の桜写真展」に寄せられた言葉です。私たちは、この言葉の意味を原点到、ファンクラブの活動を始めたのです。

私が、網走管内津別町の双子の桜に出会ったのは、八二年（昭和五十七年）です。写真家の姉崎一馬さんと詩人の谷川俊太郎さんの共著「ふたごのき」という絵本で、その存在を知りました。いいえ、存在自体は子供のころから知っていました。スキー場に生えているじやまな木としてです。以前は、町のみんながそのように思っていたと思います。

事実、双子の桜は二度ほど切られそうになったことがありました。一度目は、牧草地として作業に支障があるからと。二度目はスキー場の整備のため、丘自体も削られそうになりました。その度に、姉崎さんが写真を撮り始めたり、絵本が出たりして、危機を乗り越えてきました。

それが八四年（昭和五十九年）、双子の桜に魅せられる決定的な風景に出会ったのです。開基百年をこの年に迎えた津別町が、記念のためのPR誌を作ることになりました。三月、取材に訪れていた写真家、横井さんを双子の桜に案内したのです。

その時、満月を頂いた双子の桜が立っていました。前日に降った雪には足跡一つありません。薄暮で一段と濃くなったブルーの空が、冷気と空気の透明度を一層感じさせます。それは本当に幻想的な風景でした。

この日以来、双子の桜は自分の中に大きな存在となりました。横井さんも自分のテーマとして、これ以後、この樹を三年に渡って撮り続けることになったのです。

双子の桜は、いろいろな表情を見せてくれました。花をつけると（五月の連休すぎ）青空にピンク色がマッチして、やわらかくてふつくらしさ感じになります。夏は丘の緑と樹と雲が織り成すコントラストが鮮やかです。秋は色付いた葉が朝露で輝き、冬は雪、月、樹が静寂な世界を作り出します。そして、いろいろな野草に覆われた丸い丘が、季節それぞれの表情で樹を引き立てるのです。

一度、横井さんが子供たちと樹とを撮ったことがあります。子供たちが手をつないで、樹の周りを「かごめ、かごめ」したり、丘をつづら折りで歩いたり、樹の下で自由にポーズをとったり、大きな空の下の小きな樹、そしてなお小さな子供たちの姿は、本当にコロポックルに見えたものです。

双子の桜の魅力とは、広く高い空と寄り添う二本の樹、丸い丘とが作り出す、清楚でメルヘンチックな世界なのかも知れません。

ところが、この世界が破壊されたのです。双子の樹のある丘を含めて、一帯五十七ヘクタールを公園化する工事で、丘の芝が削り取られ、芝桜が植えら



双子の桜＝網走郡津別町にあるエゾヤマザクラの樹。小高い丘の上
に2本、寄り添いながらポツンと立っている。樹令は30
〜50年くらい。

れたのです。真つ黒な土に点在する芝桜の株、自然に近い形で調和していたものが乱されてしまったのです。子供たちが自由に駆け回ったり、若い二人がのんびりと話し合える空間が奪われました。

怒りました。周りの多くの人たちも疑問と憤激の情を表わしてくれました。「双子の桜を何とか守りたい。丘を緑に戻したい。」こんな気持ちでファンクラブの発想を生む力になりました。

そして行ったのが前述した「双子の桜写真展」です。樹の存在とすばらしさを町の人に知ってもらおうと、二週間にわたり開きました。作品は横井さんが三年かけて撮ったものです。写真展はそればかりではなく、町の桜の樹に思いを寄せる若者たちの詩、イラスト、童話も展示されました。夢を語る仲間の活動が始まったのです。

この写真展は、これ以後「双子の桜ジョイント展」として、更に新しい仲間を加えながら、北見市、札幌市へと発展し、それがまたファンクラブの仲間の輪を広げることになっていきました。

双子の桜ファンクラブは、メルヘンチックなこの樹に魅せられた人たちの集まりです。現在会員数は四十五人。写真家、OL、デザイナー、学校の先生、公務員など様々な職業の人が参加しています。出身地も、津別町をはじめ

め、北見市、網走市、札幌市など、東京都までもネットワークを広げています。

こうした人たちが、この樹の熱烈なファンとして、桜を守り育てること、樹をPRすること、桜を通して仲間の輪を広げること、という三つの目標を基本に活動しています。

これまでの主な活動としては、ジョイント展のほか、絵はがき、テレホンカード、名刺台紙の作成、双子の桜モチ、桜の樹をテーマにした組曲までできました。また、バレンタインデーのアイスキャンドル。これは、双子の桜の丘に氷のランプでハートを描き、炎に恋人たちの願いをかけるという行事で、昨年からは始めています。さらに独演会、木のシンポジウムなども開きました。会員をつなぐ会報「根っこワーク」も発行しています。

こうした活動は、すべて「この指止まれ方式」で行われています。ファンクラブは全体で動くことが、会員の地域的広がりから無理があります。これを補うのがこの方式で、だれかがアイデアを出し、それに賛同した人たちが集まって活動していくものです。自由な発想とフットワークの良さが長所で、ファンクラブの特色でもあると思っています。

双子の桜ファンクラブは最初、景観の破壊への怒りから始まりました。しかし今は、いろいろな仲間と集い、お互いに個性を認め合いながら、アイデアを出し合い、自由に楽しみながら何かを作っていきたいと思っています。

双子の桜の文化といえるようなものを創造し、それをあの丘から発信したいと望んでいます。そのためには、私たちの「友情と創造のシンボル」双子の桜とその周りの自然を守りながら、人と人とのネットワークを広げたいと思っています。